

ミナスのぞき

(十九) 第八

前に述べた以外にも俺等は云ふに云はれぬ慘憺なる數々の苦い体験を約二ヶ月間續けた。或る時は安寧な感激で醉つて本當に馬鹿らしかつた仕事をも喜ばしい氣持でやつたものだ。汗と暑氣と塵埃とそして疲勞と實が結ばれたのを見、又荒れ山が青い作物に依つて、一面に綻びが現れる。畢竟でも敷きつき靴を脱ぐ元氣もなくその儘、此の身体をカマの付に投げ出し、「お、今日も終つたか」と思ふ時俺は初めて眞の自由を知り自由よりよろこびと云ふものを知つた様にも思つたのだ。

そりかと思ふと餘りの苦しみ感し、勞働の悦びなんて何合せのない筈の此の尊かへきる身体をさへも棄て、仕舞ひたく唯々カマラーダとしての悲哀を感じ、俺の心持ちは日毎々前述の様に變つたものだ。俺は日々々變つては又變る自分自身の餘りに變化に劇し、心に思ひくらべ、男心と秋の空とが男の心とおがしくも感せられた。

愛病患者の言葉が強ち色事にのみ適用されるものでも無いな——然し何にしても俺等は耕地生に来てやうやく十日程経つた時

前にも述べた以外にも俺等は云ふに云はれぬ慘憺なる數々の苦い体験を約二ヶ月間續けた。或る時は安寧な感激で醉つて本當に馬鹿らしかつた仕事をも喜ばしい氣持でやつたものだ。汗と暑氣と塵埃とそして疲勞と實が結ばれたのを見、又荒れ山が青い作物に依つて、一面に綻びが現れる。畢竟でも敷きつき靴を脱ぐ元氣もなくその儘、此の身体をカマの付に投げ出し、「お、今日も終つたか」と思ふ時俺は初めて眞の自由を知り自由よりよろこびと云ふものを知つた様にも思つたのだ。

そりかと思ふと餘りの苦しみ感し、勞働の悦びなんて何合せのない筈の此の尊かへきる身体をさへも棄て、仕舞ひたく唯々カマラーダとしての悲哀を感じ、俺の心持ちは日毎々前述の様に變化に劇し、心に思ひくらべ、男心と秋の空とが男の心とおがしくも感せられた。

愛病患者の言葉が強ち色事にのみ適用されるものでも無いな——然し何にしても俺等は耕地生に来てやうやく十日程経つた時

沼の第一歩を卒業しよ／＼珊瑚の事だな、朝早く起床し洗面

珠植付の請負師今まで出世した

譯だ、カマラーダとしての俺か

らみればないして出世なんだ。

珊瑚請負といふのを解り易く云

へば、自分で植付用の穴を掘り

けるではないか、千枚張ともい

い体验を約二ヶ月間續けた。

珊瑚の苗木を運び込みて來て

かねがで、面の皮の厚も厚に

喜ばしい氣持でやつたものだ。

汗と暑氣と塵埃とそして疲勞と

實が結ばれたのを見、又荒れ山

が青い作物に依つて、一面に綻

びが現れる。畢竟でも敷きつき

靴を脱ぐ元氣もなくその儘、

此の身体をカマの付に投げ出

し、又一勞働者としての快感を

心行くばかり味つた事もあつた。

一日の勞働に心身共に疲れ重

い足を引摺り乍ら空腹を抱へ漸

く家に辿りつき靴を脱ぐ元氣も

なくその儘、此の身体をカマの

付に投げ出し、「お、今日も終つたか」と思ふ時俺は初めて眞の自由を知り自由よりよろこびと云ふものを知つた様にも思つたのだ。

そりかと思ふと餘りの苦しみ感

し、労働の悦びなんて何合せの

ない筈の此の尊かへきる

身体をさへも棄て、仕舞ひたく

唯々カマラーダとしての悲哀を

感じ、勞働の悦びなんて何

合せのない筈の此の尊かへきる

身体をさへも棄て、仕舞ひたく

唯々カマラーダとしての悲哀を

十 手 物 語

田村西園

十手物語

田村西男

御用間の蝙蝠安が、木所小梅に所用があつて番場の樂師前へ差しかつた時、淺草辨天山の鐘が四つを撞出した、駒形堂の邊に灯が一つボツリといてゐるばかりで、向ふ河岸は眞暗であるばかりで、向ふ河岸は眞暗で宮戸川の流れが鉛のやうな色に波のうねりを見せてゐた。

彼岸過ぎて十月中旬、川風は岸から吹き上げて、唐棧の裾がうら寒くひるがへる。庵崎の方へ雁が空低く鳴き過ぎた。

ばつたり打つかつた男がある、「氣をつけろ」

蝙蝠安は、今横丁から息せき切つて駆けて來た、男に突當たられて、いやつて程足を踏まれたのでたつた。

「助けておくんなさい。助けておくんなさい」

男は蝙蝠安の袖にすがつて、ぶるぐぶるへてゐる様である。蝙蝠安は四邊を見たが、誰も来ぬる氣勢は無かつた。

「一体何うしたんだ。誰も来る様子は無い。何うしたんだ。物盗りにでも遭つたのか、おひるまぎか、喧嘩でもして逃げて來たのか」

蝙蝠安は斯う聞いたけれど、男は口がまだきかれないので、餘程何物かに驚かされてゐるらしい。

「誰も来ますまい。大丈夫でせうか。私は驚いて了つたんであります。有難う御座います。何うしたら宜いかと思ひました、助かりました」

男はまだ不安が去らないと見え、背後の方を氣にしてばかり居た。

「仔細を話しながら、己はお前が心配する様な者ぢやない」

蝙蝠安は懐にかくしてあつた

差後すさつたが、また廟へ出て「左様で御座いましたが、それはまあ善いお方に助けて頂きました。私はこの妙源寺の横に住み、御賣はなんだ」「ハイ、田舎廻りを致して居ります、小間物屋で御座います。男は漸く落付いて來たのですね」

「商賣はなんだ」「女死骸だ」蝙蝠安の鋭い眼は、暗中にギヨロリと輝いたのである。

「左様で御座います。私は何をすらんだと申しますと、人の男が、短刀をヤラリと抜いて、静かにしろ。私は静かに出来ません、む前さん達は全体の家で何をしてゐるんだと言つて、新助はな略を物語つた。

「お前の家の案内しろ」

「へい。ま、まだ居るかも知ません」

「構はない、案内しろ、お前様はさせないから連れて行安心しろ」

「へい」新助はおづくして露路を入つた。突當つて北番場の通りを直ぐまた露路を入るどちやうど妙源寺の裏に、井戸がある、銀杏の葉落散つて、寺では木魚の音を鳴つて居た。

日伯間唯一の
政府命令定期船
日本郵船會社
客船
とす丸
及左記へ
S. DOS SANTOS & CO.
na Baixão de Tapetininga,
do Commercio, 84
SONS & CO. LTD.
PO- AV. Rio Branco 37